

自蹊庵便り

平成三十年臯月

NO 131

く今、陰陽二気に思いを馳せてみれば、

かつてネット社会が訪れると云われて二十余年、もはや生活になくはならない存在になりました。お人とお人をつなぎ、お

人と物とを迅速につなぐのがインターネットとかと思いつつも、達者にこなせないうちに社会は今、お人の媒介を必要としない機械に組み込まれた、物同士のつながりの次元になりつつあるようです。人間さんの操作や指示もいなくなるのでしようね。自動的に何でも受発信する社会になっていくのでしようね。

いつも思いのよぎりますのは、一万三千年ほども続いたかもしれないと云われる縄文時代から、紀元千年、二千年と超え、只今は二〇一八年。悠久の営みから見れば、ほんの一齣を受け持ち、生かされている命にございます。どの途上を受け持ち、どんな役目を担っているのかしら…と。

生活も食もついこの間までは急速に変化

していく様を、「音を立てて変わっていく」という表現をしたものですが、只今は音もなく急変しているようなこ・こ・ちがいたしております。

音もなく変化していくもの、食の立場から云えばそれは発酵食品です。そう、只今はまさにネット社会の最前線に向かっていきません。

そんな音なしのスマート文化が浸透する気配は人工頭脳と共に、すぐ足許まで忍び寄ってきております。日々、車で奔走している私ですが、近い将来においては車も自動車運転主流になっていくことでしよう。

冷蔵庫を開けようとしたら、ストックを知らせ、鮮度の落ちかけているものから教えられ、それに見合った献立まで瞬時に答えてくれるようになり、スーパーに行けばカートが個人情報認識し、電子マネーが自動決済ということ等々…。発酵過程も

自動決済ということ等々…。発酵過程も

う菌の仕上がり時期にきているような気配、もうすぐそこまで…。

そんな時代の予感を抱きつつ、相も変わらせず、陰陽五行の世界に身を置き、ひたすらに火と水と土の中にての日々の過ぎ行きにございます。

この陰陽二気なるもの紀元前二千年ほど前には最先端の科学であったことでしょう。その最先端科学が日本に渡ってきたのは、

中国から暦について書かれた「曆本」が渡来した六世紀半ば頃、この渡来した暦を理解するためには、陰陽五行説を避けて通ることはできませんね。曆学をもとに朝廷を中心の祭り事政治をはじめ年中行事、医学や農学など、あらゆる基本の原理として、ついこの間まで、少なくとも明治の声を聞くあたりまでは、活用されてきたように思います。

当然としてその只中の日々、五百年ほどの茶の湯の世界も、陰陽二気と五行なくし

ては成り立たぬことであります。何と云つても日本人の先祖は中国ありき、朝鮮ありきから紐解かないわけにはいきませんよね。渡来した文化を日本独特の消化力をもつて、今に至つての形ではあります。特に茶の湯と日本料理の上にあつては、陽である奇数を尊び、基本の数としています。

只今の中国料理や韓国料理に、どれほどの陰陽が生かされているか定かではありませんが、日本料理は実に活き活きとした存在感をもつて今に生きています。

「正しい切り方」、「正しい盛り方」そして、食材の順位までもが、海の魚は川魚寄る上位ですが、鯉はその生命力から最も上位とされている等々、こうした様々の規則の創造的権威づけは、中国から渡来した陰陽五行が根付き、それを頑ななまでに日本人の美意識で進化させ守つて、今日に生かされているのが日本という國にございます。美しく、格調高く発展し守つてきた日本料理、そこには陰陽和合の美が根底をなしています。陽の中に陰あり、陰の中に陽があることを理想とし、素材の選定、献立、

盛りの中などに心血を注いできたのが、和の料理、懐石料理のように思います。盛りつけに天と地があり、器の多種多彩なもの、切れ味の良い和包丁で、食材にあつた適材適所の切り方あつてのこと、豊かな季節の恩恵の上に日本人の感性は育まれ、独特の食文化の発展を見てきたように思います。それもこれも根底に陰陽の下地あつてのことではなかつたかと…。

非科学的で絶対的なものではないと論ずる人も少なくない今日ではありますが、陰陽和合の世界、料理にあつては食べる人への健やかさへの祈りであり、不老長寿の道への願いの込められた手立ての文化として営々と受け継がれてきたように思います。

一つ面白いのは中国の本来本元では、偶数を陽数としているというのです。それと今一つ不思議なのは左上位のはずなのに左遷とか左前とか、マイナーな使われ方をしているのはなぜか等々、さあ、紙面も尽きましたので、次号をお楽しみに！

茶事教室の御案内

皐月の茶事（端午・初風炉）

五月十三日（第二日曜）

五月十四日（第二月曜）

五月十五日（第三火曜）

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

水無月の茶事（花寄せ）

六月十日（第二日曜）

六月十一日（第二月曜）

六月十二日（第二火曜）

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

両月とも

会費 一万円（レギュラー者）

会費 一万一千円（半レギュラー者）

会費 一万二千円（単発者）